

# 日本音楽集団

PRO MUSICA NIPPONIA

第206回定期演奏会

The 206th Regular Concert

## 新知故温 箏 十三絃箏の過去と未来



演出：元永拓  
舞台監督：中島隆

2012年7月13日[金]

午後7時開演

津田ホール

主催：特定非営利活動法人日本音楽集団  
助成：平成24年度文化芸術振興費補助金(トップレベルの舞台芸術振興事業)  
後援：公益財団法人日本伝統文化振興財団  
JAPAN TRADITIONAL CULTURES FOUNDATION

■ 日本音楽集団：http://www.promusica.or.jp/ E-mail：office@promusica.or.jp



## プログラム 解説

### 1、ダンスコンセルタント第1番《四季》 (三木稔/1973)

Dances Concertantes No.1 "Four Seasons"

[指揮] 稲田康

[笛] 竹井誠

[尺八I] 米澤浩 大賀悠司 [尺八II] 渡辺淳 田野村聡

[三味線] 簗田司郎 山崎千鶴子

[琵琶] 久保田晶子 藤高理恵子

[箏I] 熊沢栄利子 丸岡映美

[箏II] 久本桂子 伊藤麻衣子

[十七絃] 城ヶ崎美保 佐藤里美

[打楽器] 尾崎太一 島村聖香 山内利一

作曲者が、かつて作曲を担当した舞踊シーンから楽しく易しい旋律を選び、夏の合奏研究会でアマチュアの人たちにも演奏できるよう再編成された組曲。四季を表現する各章は文字通り〈踊る春〉、抒情的な〈水巡る〉、〈秋、そして〉獲り入れの踊りを経て、クールな〈風の花〉が〈エピローグ〉で締めくくられる構成になっている。日本音楽集団第21回定期演奏会初演にて初演された。

### 2、箏四重奏曲～みみらくの島 (高橋久美子/2009)

Mimiraku Island for Koto Quartet

[箏I] 山田明美 [箏II] 佐藤里美 [箏III] 伊藤麻衣子 [十七絃] 久本桂子

「五島列島の三井楽(ミミラク)の島へ行けば、亡き人の顔を見ることが出来る」という伝承があり、それは万葉集や蜻蛉日記にも詠まれている。

かつて三井楽は遣唐使の日本における最後の寄港地であり、交通上の要地であった。と同時に遣唐使の生死の境を定め多くの人々の冥土への旅立ちの場所でもあった。すなわち、この地では誰もが神仏の加護にすがらるほかに術はなく、生への蘇りを切望し、また死霊の冥福を願ったのである。

このようなことから、生者と死者の行き交う場所とされたのが「みみらくの島」である。

この箏四重奏曲「みみらくの島」では演奏者に響き(魂)を伝え合う役割を担わせ、それぞれの旋律が絶え間なく交差し、時には一体化しながら、あの世ともこの世とも言えない第二の世界「みみらくの島」がステージ上で展開されればと願っている。

(高橋久美子)

### 3、3つのカプリース (秋岸寛久/委嘱初演)

3 Caprices

[尺八] 原郷隆

[三味線] 穂積大志

[箏I] 熊沢栄利子

[箏II] 桜井智永

[十七絃] 城ヶ崎美保

楽器演奏って、自転車や車の運転、パソコンの操作などと比べると、ずっと難しいと言われますよね。でも、地道で苦しい訓練を乗り越え、ある程度自由に楽器が操れるようになったときの喜びは、ほかでは味わうことができないものでしょう。そしてさらにアンサンブルまで楽しめるわけですから、全くうらやましいかぎりです。

そんなわけで、「もし楽器が演奏できたら、気のあったセンスのいい仲間たちとこんな音楽をアンサンブルしたい」という曲を作りました。本日のメンバーもきっとアンサンブルを楽しんでくれることでしょう。その楽しさが伝わって、「参加したい」と感じていただけましたら幸いです。

(秋岸寛久)

## 4、五段砧 (光崎検校)

Godan-Kinuta

[高音] 田村法子 [低音] 宮越圭子

京都の光崎検校 (?~1853年頃) の作曲で、秋風の曲と共に光崎の箏曲復古運動のシンボルともいえるべき名曲。その運動とは、当時京都で流行していた三味線と替手式箏との合奏による「手事物」といわれる地歌の箏曲化に対して、八橋以来の純粋な箏曲、すなわち組歌や段物、砧物などを経て復古精神に芸術上の基盤をおく立場のことである。

この曲の成立以前に生田検校作曲と伝えられる「砧」や、それを発展させた「二重砧」、三味線の「四段砧」、山田流の「四段砧」などを集大成したような形で新たに作曲されたものと考えてよいであろう。

平調子の低音の五段目には「六段の調」の五段目が応用されており、本雲井調子の高音は繊細華麗な多音性を余すところなく発揮している。

## 5、郢曲「鬢多々良」 (伊福部昭/1973年)

Bintatara Per 16 strumenti di Giappone

[指揮] 田村拓男

[笛I] 竹井誠 [笛II] 遠藤悠紀

[竈笛] 藤崎重康 [能管] 新保有生

[箏] 西原祐二 [笙] 三浦礼美(助演)

[薩摩琵琶] 久保田晶子 [筑前琵琶] 藤高理恵子

[箏I] 山田明美 [箏II] 桜井智永 [箏III] 田村法子

[十七絃] 宮越圭子

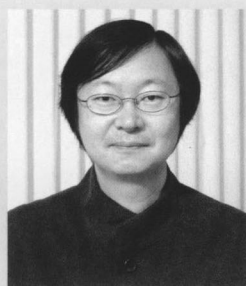
[打楽器] 尾崎太一 盧慶順 島村聖香

[楽太鼓] 山内利一

この作品は1972年に文化庁の委嘱により作曲、73年秋の芸術祭主催公演「日本音楽集団第20回定期演奏会」で初演された。作者の初めて手掛けた邦楽器のための作品である。01年の海外公演「ブラハの春音楽祭」でも演奏された。

「郢曲とは、平安中期にわが国に興った音楽の一形態であるが、様式としては、宮廷社寺楽と庶民の俗楽との中間に位していた。したがって旋法なども、わが国と唐・天竺などとの混淆にあったと考えられている。鬢多々良とは、詠唱を伴ったかなりくつろいだ舞い楽で、あまり厳格に定った振りはなかったらしく、各自が自由に舞い、やがて乱舞に至るのが常であったとされる。」(初演プログラムより)

第1部分は、絃楽器群が三つの旋律を綾なし反復する上に、管楽器群の伸びやかな旋律が奏でられる。第2部分は、各楽器が順次現われ旋律を歌う。そして第3部分は再現部であり、全楽器の大合奏となしてしめくられる。



秋岸寛久

助川敏弥、浦田健次郎、三木稔の各氏に師事。東京音楽大学卒業時に作曲した「三味線とオーケストラのための協奏曲」が仙台フィル、日本フィルの定期演奏会等で演奏される。大学研究科を修了後、日本音楽集団に入団。日本フィル九州公演、横浜国大グリークラブ、NHK邦楽技能者育成会、オーストリア、シュライニンク音楽祭、オーケストラ・アジアなどからの委嘱や、市川猿之助スーパー歌舞伎の音楽、NHK伝統和楽団の編曲等を手がける。

